その老人の家を世田谷に訪ねたのは、二年前のことだ。
もうすぐ八十歳になる、元テレビ局職員の老人は、その前年に夫人を亡くし、特別養護老人ホームに入居する事となり、父親の代から住んでいた築七十年の自宅は取り壊しが決まっていた。
「家のなかを整理しておりましたら、こんなものが天井裏から出て参りまして」
応接間に向かい合って坐る私に、老人はぶ厚い茶封筒を取り出し、木製のセンターテーブルに置いた。私は茶封筒を受け取り、中身を改めた。
原稿用紙の束が入っていた。かなり古いものらしく、ところどころに染(し)みがついている。そして、一枚目の原稿用紙には真ん中におおきく、こう書き付けられていた。

曠野に咲く花　　菊池真清

「祖父が書き残したものらしいのです」
「この菊池真清(まさきよ)さんが、お祖父さんなのですか」
そう問うと、
「真清(まきよ)と訓(よ)みます」
老人は、そう訂正し、壁の天井近くに視線を移した。そこには、日露戦争の頃らしい軍服を着た老人の祖父の写真が飾ってある。
「祖父は元軍人で、日清戦争と日露戦争に従軍したらしい事は、父から聞いておりました。その原稿は、二つの戦争の間、祖父が大陸で諜報活動に従事していた頃の回想らしいのです」
もし、お宅で出版してくださると有り難いのですが、一つ、読んでいただけませんか？
老人にそう頼まれて半年後、結局、私の勤務する出版社では企画が通らず、返却しようと特別養護老人ホームに電話をかけたところ、老人は一ヶ月前に肺炎で亡くなったと知らされた。
その後、私は幾人かの知り合いの編集者に出版を打診してみたが、いずれも断られた。本が売れない現在、無名の軍人が残した手記を市場に出してやろうとチャレンジする勇気ある編集者はいない。
ここに紹介するのは、老人から託された菊池真清の手記そのままではない。老人が亡くなって一年後、私は定年退職した。暇にあかせて国会図書館に通ったり、菊池の郷里である九州某市等で資料を収集し、現代の読者にもわかりやすく補筆し、書き直したものである。

曠野に咲く花　菊池真清の手記

一、悪夢

それは、眠りについた私の脳裡に、繰り返し現れる悪夢だ。

私の眼の前に、銃弾を浴びて血まみれになった、五歳くらいの少女の死体が横たわっていた。私は、小銃を握りしめ、茫然とその死体を凝視していた。

私の耳のなかで、ある言葉が繰り返し響いていた。

「東洋鬼！」

そして、私の周囲を、憎悪に満ちた、女の眼差しが取り囲んでいた……。

明治二十八（一八九五）年、二十八歳の陸軍中尉だった私は、台湾の地にいた。

前年八月、わが大日本帝国は清国に宣戦布告し、日清戦争が始まった。「眠れる獅子」の異名を持つ大清帝国を相手に、わが帝国陸海軍は連戦連勝、その年の五月には下関で講和条約が結ばれ、台湾および澎湖諸島がわが国に割譲された。

だが、講和に反対する台湾駐留の清国軍が台湾民主国を名乗って激しく抵抗した。これを鎮圧すべく、私が所属する近衛師団に出動命令がくだったのだ。

五月末、三貂角という台湾北東の海岸に到着したわが部隊は、南下を開始した。幸い、私のいた第三中隊はたいして敵の抵抗にも遭わなかった。

第三中隊は、最前線で進軍する第一中隊、それに続く第二中隊の後方に位置している。敵軍との戦闘は、たいてい、第一中隊でけりがつく。装備、人員ともに日本軍が圧倒しているからだ。

にもかかわらず、二百名で上陸した第三中隊の人員は、日に日に、その数を減らしていた。勇ましく敵軍と戦って武功をたて、故郷に錦を飾る。そんな思いで勇躍、台湾に上陸した我々を待ちかまえていたのは、華々しい戦闘ではなく、熱帯でコレラに罹患し下痢に悩まされた挙げ句の友軍兵士の死と、現地住民の執拗な抵抗だった。

第一中隊が敵と戦った跡地を通過する時、私たちが衝撃を受けたのは、しばしば武装した現地女性の死体が遺されていた事だ。

「女まで抵抗するとは……」

私の身の回りの世話をする従卒の井口虎吉伍長が呻いた。

「すでに条約で台湾は我々のものになったというのに、頑迷(がんめい)な連中ですな」
初陣(ういじん)の私と違い、戦争開始以来、数々の戦闘を経験してきた井口伍長の強張(こわば)った口ぶりに、私は思った事を口にできなかった。
女まで抵抗に加わるとは、住民は、よほど日本軍を憎んでいる……。
いくら、最新鋭の武器を装備しているといっても、命は一つだ。たとえ、最前線の部隊が敵軍を掃討した後であっても、女子どもでさえ、武器を持って抵抗してくるとなると、一瞬たりとも油断はできない。その緊張感が兵たちの心を荒(すさ)ませている事は、彼らの暗い無表情な面差しからも見て取れた。
そして、新米の中隊長である私は、どうやって彼らの心を慰めればよいのか、見当もつかなかった。

密林を抜け、二十ほどの貧しい家が肩を寄せ合うように並んでいる村が見えてきた。
まだ敵が潜んでいる可能性もあるので、兵に斥候を命じた。戻ってきた兵は、
「友軍がすでに占領していて、大丈夫であります」
と報告した。安堵して村に入ると、様子がおかしい。
村の中央に、数十人ほどの日本兵が、何かを取り囲むようにして集まり、それを村人たちがこわごわと遠巻きに見ている。村人たちの面差しには、恐怖と、悲しみ、そして怒りが浮かんでいた。
何事かと近寄ってみたら、三人の現地女性が後ろ手に縛られ、引き据えられていた。その背後にそれぞれ一人ずつ、日本兵が抜刀して立っている。
女たちを、斬首刑に処そうとしているのだ。
「待て！」
私は、今にも刀を振り下ろそうとしている日本兵たちを大声で制し、広場の中央に進み出た。
「指揮官は誰か？」
「私であります」
曹長の階級章をつけた小隊長が進み出た。
「何があった？」
挙手の礼をかわし、小隊長に尋ねると、
「あの女たちは、わが軍の木村二等卒を殺害したのであります」
と答えた。
「ほんとうか？」
私は、三人の女たちを見やった。いずれも十代半ばくらいの小柄な少女たちだ。武装した日本兵を殺せるだけの力があるとは、とても思えない。
「それで、あの女たちをどうしようというのだ？」
と問うと、小隊長は答えた。

「首を刎ねます」
「そうするよう、軍法会議で判決が下ったのか？」
「いいえ」
小隊長は首を振った。
「軍法会議は開いておりません。わたくしの一存であります」
私は仰天した。下士官が勝手に現地住民を処罰する事は固く禁じられている。
「それはいかん」
私は説諭した。
「陸軍刑法では、現地住民が我が軍に被害を与えた時は、三人以上の将校からなる軍法会議を開いて刑を下さねばならない事になっている。もし、あの女たちが本当に日本兵を殺害したのであれば、私が引き受ける。正式な手続きをとって軍法会議を開く。貴様は、商人として出廷してくれ」
しかし、小隊長は首を縦に振らず、喰ってかかった。
「中尉殿。あの女たちが、木村に何をしたかを御存知になれば、きっと処刑に賛同してくださるはずです！」
「何をしたというのだ」
「木村の睾丸を潰し、男根を切り取って口に詰めたのです」
私は息を呑み、三人の女たちを見つめた。私の背後で、井口伍長をはじめ部下の兵たちが溜息を吐くのが聞こえてきた。
縛られた女たちは、私たちを見つめて、にやにや笑っている。怯えている様子はまったくなかった。
一人の少女が、私に向けて唾を吐いた。数メートル離れていたので届くはずもないが、それを見て小隊長は金切り声をあげた。
「御覧になりましたか？　ああいう不届きな連中を、私は許してはおけません。今すぐ打ち首にします」
「中尉殿」
井口伍長が寄ってきて、小隊長から引き離すようにして耳打ちした。
「行きましょう。関わり合いになっちゃ面倒です」
「しかし……」
「あいつら、気が立ってます」
井口は、小隊長や、友軍兵士たちを見やって続けた。
「気が立った兵隊は恐ろしい。中尉殿にだって何をするか分かりませんぜ」
「ならん！」
私は小隊長を怒鳴りつけた。
「すぐ、斬首はやめさせろ。軍法会議を開くまでは、どこかに閉じこめて逃げぬよう見張っておけ。さもなくば、貴様を抗命罪で師団長に突き出すぞ！」

小隊長は俯き、唇を噛みしめていたが、やがて少女たちの背後に立っている兵たちに、
「あの家に閉じこめておけ」と、一軒の農家を指さした。
兵たちは、それぞれ女たちを立たせた。と、その時。
「ぐっ！」
一人の兵士が呻いた。さきほど私に唾を吐きかけた一人の少女が、彼女を立たせた兵士の股間を蹴り上げたのだ。
少女は、そのまま走り出した。
「許さん」
小隊長が怒鳴った。
「撃て！」
止める暇もなかった。小隊長の部下の兵たち数名が、小銃を構え、村の外に向かって逃げようとする少女の背後から、銃弾を浴びせたのだ。
銃声が鳴り響き、少女は一瞬棒立ちになり、そのまま俯伏せに倒れた。蜂の巣のようになった背中から、血が噴き出した。
残る二人の少女たちが悲鳴をあげ、大声で日本兵たちを罵りはじめた。
「東洋鬼！」
「東洋鬼！」
それが、日本軍に対する支那人の憎悪を込めた言葉である事は、私も聞かされていた。恐れる事なく、眼を見開き、溢れる涙とともに罵り続ける少女たちに、兵たちは一斉に銃を向けた。
「いかん！」
私は、二人の少女と、銃を構えた兵たちとの間に走り込み、遮った。
「この娘たちまで射殺するのは、越権行為だ！　銃をおろせ！」
私が所属する第二中隊の中隊長が村に到着したのは、その二時間後だった。私は経緯を報告し（小隊長が、少女たちを勝手に処刑しようとした事は伏せた）、軍法会議の開催を要請した。中隊長は同意してくれたが、少女たちが住んでいる村で軍法会議を開くのは危険だった。
私が責任者として、少女たちを別の場所まで護送する事になった。少女たちは、江戸時代の罪人のように籠に入れられ、棒でぶらさげて前後を二人の兵が担いで運んだ。
「やれやれ……」
兵たちの呟きが、私の耳に入った。
「あんな女ども、とっとと打ち首にすりゃよかったんだ」
「おかげで一苦労だぜ」
「やめろ」
井口伍長が大声で、兵たちを咎めた。だが、彼が兵たちに寄っていき、こう言うのも聞こえてきた。
「お育ちのいい隊長についちまったんだ。我慢しようぜ」

私は、前線の村に駐屯していた第一中隊長に二人の少女を引き渡した。軍法会議が開かれ、二人の少女は銃殺刑に処せられた。

現地住民のゲリラ的抵抗と、コレラやマラリアなどの風土病に悩まされながら、私の所属する近衛師団が台湾中部の嘉義(かぎ)城に到着したのは、十月だった。上陸した時、私は二百人の部下を率いていたが、今や健康な者は四十名余りにまで減っていた。

一方、嘉義城には、台湾民主国総統を名乗る劉永福の叔父である劉歩高が守備隊長として精鋭を率いて籠もっており、激戦が予想されていた。

十月九日、城を囲んだ近衛師団は、総攻撃を開始した。まず、砲台陣地から城内に砲撃を打ち込み、続いて歩兵部隊が城門に殺到した。

われわれ第三中隊は、西門を攻撃した。我が軍の砲弾がひゅるひゅると音をたてて撃ち込まれるなか、石積みの城壁に梯子(はしご)をかけて兵たちを登らせたのだ。城壁からは、守備兵がさかんに銃撃を加えて抵抗し、幾人かの日本兵が転げ落ちた。

だが、一時間余の後、敵の抵抗がやんだ。日本兵は次々と城壁をよじ登り、日章旗を振って万歳三唱した。

やがて西門が開けられた。私は、他の数名の将校とともに、城内の索敵を命ぜられた。それぞれ、兵を一人ずつ従えて、残兵が潜んでいないかを調べるのだ。私は井口伍長とともに、城内に入った。

城内は悲惨だった。砲撃でほとんどの家屋は破壊され、重傷を負った敵兵の呻き声や、残っていた市民たちの号泣に満ちている。

重傷を負った敵兵が、私の足首にしがみついた。必死に助けを求める敵兵の腕を取って起こそうとした時、井口伍長がいきなり小銃を敵兵の額に押しつけ、銃弾を撃ち込んだ。敵兵の頭部が吹っ飛び、脳漿(のうしょう)をまき散らしながら倒れた。

「捕虜にしても、もはや薬も残り少なく、手当てする余裕はありません」

茫然とする私に、井口は平然と言った。

「いずれ死にます。早く楽にしてやるのが、武士の情けです」

やがて、東門と南門の間にある、砲弾を受けて穴の空いた屋敷の前にさしかかった。

不意に銃声が響き、井口伍長が仰向けに吹き飛んだ。

「井口！」

肩に銃弾を浴びて失神した井口伍長に駆け寄ろうとした時、さらに銃声が響いて、私のすぐそばの地面に着弾した。

明らかに、屋敷に空いた砲弾の穴から銃撃されている。

私は、すばやく動いて、物陰に隠れた。見廻したが近くに友軍はいない。一人きりだ。

井口伍長は右手で肩を押さえて呻(うめ)いている。その傍らに、またも、空気を切り裂く音とともに着弾し、砂煙があがった。

このままだと、井口が殺される……。

私は決心した。穴の影から撃ってくる敵を仕留めねばならない。私は、遮蔽(しゃへい)物に身を隠しながら、屋敷に接近した。そして、穴の内部に連発銃を向け、銃弾を撃ち込んだ。

穴のなかで、悲鳴があがった。ついで、どさりと人の倒れる音。

私は銃を構え、穴に飛び込んだ。富裕な屋敷だったらしく、壁に据え付けられた豪奢(ごうしゃ)な黒檀(こくたん)の家具に、銃弾を浴びた死体がもたれるようにしている。三十過ぎの男だった。手に小銃を持っている。

こいつだったのか……。

油断なく小銃を構えて近づきながら、私は、男の傍らにある、もう一つの血まみれ死体に気付いた。

五歳くらいの少女だった。

後悔と恐怖心がこみあげてきた。

三十過ぎの男と五歳くらいの少女、四つの見開かれた眼が、私を睨(にら)んでいた。初めて、人を殺した。そのうち一人は、まだ幼い少女……。

私は、小銃を投げ出すように放り出して、立ちすくんだ。

その時、近くで悲鳴があがった。見ると、二十歳半ばくらいの女が、両手で自分の頭髪をつかみ、二つの死体を凝視していた。

この娘の母親だろうか……。そう思うより早く、女が私に向かって突進してきた。

重い衝撃が、私の下腹部に走った。女は、私の股間を蹴り上げていたのだ。

嘔吐がこみあげ、下半身が麻痺し、膝が崩れた。私は、両手で股間を押さえてうずくまった。

女は私が放り出した小銃を拾い上げ、銃口をこちらに向けた。

殺される……。

私は両目をつぶった。

罰だ……。

いたいけな少女を殺してしまった罰だ！

うわあああああ！！！！！

私は絶叫した。

「走開(ゾウカイ)（どいて）！」

頭上で、甲高い支那語が響いた。

眼を覚ました私の頬(ほお)を、シベリアの寒風が叩いた。

私は、誰かの胸に頭をもたせかけていた。ぶあつい綿入れに覆われた胸のやわらかなふくらみが、頭部に感ぜられた。

「走開(ゾウカイ)、大叔(ダァーシュー)（どいて、おっさん）！」

私は突き飛ばされ、堅い甲板に身を投げ出された。

そこは、ロシアと清の国境を流れる全長二八二四キロメートルのアムール川を横断する

汽船の甲板だった。

また、あの夢を……。

五年前、台湾で五歳の少女を誤って射殺してしまって以来、数夜に一度はうなされる悪夢だ。

一九〇〇（明治三十三）年三月末。

前年の八月、陸軍を離れて民間人となり、ロシア語留学と称して、ロシア東端のウラジオストックに滞在していた私は、北西まで水路一五〇〇キロを溯（さかのぼ）り、シベリアの奥地ブラゴベシチェンスクへと向かっていた。

同地には、シベリアに駐留するロシア軍の根拠地があった。私は、満州進出を狙うロシアの動向を探るという密命を帯びて、昨年末からロシアに滞在していたのだ。

ウラジオストックから乗り込んだ汽船の甲板には、並べられた鮭樽（さけだる）や麦粉袋の隙間に、最安値で乗り込んだ甲板客、ロシア人や支那人や朝鮮人の労働者が所狭しと毛布にくるまって坐っていた。

まだ結氷が残るアムール川を航行する船の甲板で、昼も夜も過ごすのは並大抵の辛さではない。だが、雑多な人種の乗客と親しくなるのもまた、情報収集の一手段だ。私は、彼らにウォッカを奢（おご）ったりしながら仲良くなり、噂話に興じた。

そして十日目の今日は、目的地のブラゴベシチェンスクに着く予定になっている。

昨日、船は、アムール川の清国側に位置する瑷琿（あいぐん）という都市に寄港した。そこで、分厚い綿入れを着込んだ支那人らしい小柄な少年が乗ってきて、私の隣りに坐った。眼の大きな、女のような美少年だった。支那語で話しかけてみたが、返事をしない。

そのうち私は居眠りをしてしまい、少年にもたれかかっていたのだ。

「対不起（ドゥイブウーチィー）（すまない）」

私は少年に謝った。少年は私に背を向け、両手で身を抱えるようにして、麦粉袋にもたれて眼を閉じた。

かぶったロシア帽からはみだした髪の毛に覆われた、白いうなじが眼に入った。

どうも変だ……。

少年だと思っていたが、先ほどもたれていた彼の胸には、確かに柔らかな乳房の存在が感じられた。もう声変わりしている年頃に見えるが、声も女のように細くて甲高い。

私は立ち上がった。まだ到着には時間もあり、眠気（ねむけ）は残っていたが、再び寝る気にはなれなかった。

また、あの悪夢を見たくない。

私は舷（ふなばた）に近寄り、川面を見つめた。暦（こよみ）では日本はすでに春だが、シベリアはまだ寒い。岸辺のところどころが氷結し、沖には氷山も見える。実際、十日間の船旅で、三度、船は座礁した。

五年前の明治二十八年十一月、あの嘉義城での戦闘が終わってから一ヶ月後、台湾民主国は瓦解し、私たちの部隊は日本に凱旋した。新橋駅では日の丸を振る群衆に迎えられ、

金鵄勲章を賜る栄誉に与ったが、私の心は晴れなかった。数日に一度は悪夢にうなされるようになった。

清国が敗れた後、ロシアが満州に勢力を伸ばし始めた。ロシア研究の必要が叫ばれはじめ、私は神田の外国語学校に通ってロシア語と支那語、さらには朝鮮語を学んだ。語学に打ち込む事だけが、今にも崩壊しそうな私の精神を救ってくれた。やがて悪夢を見なくなった。

二年後の明治三十年、親戚のすすめで結婚した。これが間違いだった。夜中にふと目を覚まし、月光に照らされた妻の寝顔を見ると、あの台湾での悪夢が甦ってきた。さらに翌年、娘が生まれると、より激しい罪悪感に苛まれた。連夜のように、私が射殺した少女の顔が夢に現れ、私は酒に溺れた。妻と娘を殺して自殺することすら考えた。

私が、陸軍上層部にかけあい、留学を装ってロシアでの諜報活動を始めたのは、むろん膨脹するロシアの危機から祖国日本を救う一助になれば、と考えたからだが、本当は、これ以上日本にいると、精神に異常を来しかねなかったからだ。

「放开、大叔（放せ、おっさん）！」

またも背後で声があがった。振り向くと、真っ赤な顔をした四十くらいの男が、あの美少年の胸ぐらを掴んでいる。

「黙れ、小僧！」

日本語だった。酒に酔っているらしい。

「敗戦国の支那人のくせに、日本人の足を踏んづけておいて、謝りもしないとは、生意気だ。こらしめてやる！」

拳を振り上げ、少年を殴りつけようとした瞬間、男の体がのけぞった。

少年が膝を突き上げ、男の股間に食い込ませていた。

男は白眼を剥き、どさりと甲板にくずおれた。両手で股間を押さえ、全身が烈しく痙攣している。

あの時と同じだ……。

私の脳裡に、嘉義城内の屋敷で、支那の女に股間を蹴られた経験が甦った。あの時の私と同様、あの男も、激痛と、嘔吐と、屈辱感に苛まれているに違いない。

そう思った時、不思議な感慨が湧き上がった。塞がれていた胸の裡が、晴れてくるようだった。

「ばぁか」

少年が、倒れた男に唾を吐きかけ、日本語で言った。確かに日本語だった。しかも、どう考えても女の声だった。

少年は、顎をあげて胸を張り、荷物を肩に背負い、大股に歩いて舷へと近づいた。

ふと見ると、少年に股間を蹴り上げられ悶絶する男の傍らに、鎖のついたロケットが落ちているのに気づいた。真鍮製らしい開閉式のチャームがついたペンダントだ。蹴られた日本人のものとは思えない。

腰をかがめてロケットを拾い上げ、チャームを開いてみた。小さな写真が入っていた。髪を結い上げた、十三、四歳くらいの日本人少女が二人並んで映っている。

右側の少女は、あの少年にそっくりだった。

顔をあげ、少年を捜そうとしたとたん、汽笛が鳴った。ブラゴベシチェンスクへの到着を告げる音だった。甲板客が一斉に立ち上がって舷(ふなばた)に向かった。少年の姿は、人垣に隠れて見えなくなった。

やがて接岸した汽船を下りた後、私はしばらく少年を探してみたが、見付けることはできなかった。

ブラゴベシチェンスクは、十九世紀半ばにロシアによって建設された要塞都市である。かつては清国領だったが一八六〇年の北京条約によってロシアに割譲された。ロシア皇帝に忠実なコサック軍団（ウクライナの軍事共同体に起源を持つ、ロシアの軍人階級）が駐屯しており、また、シベリア鉄道建設のための資材が運び込まれ、この地で船に積んでアムール河を下っていくこともあり、ロシアの膨脹政策を垣間(かいまみ)見るには恰好(かっこう)の地といえた。

「ようこそ」

武市在留日本人会事務所の看板を掲(かか)げた、煤(すす)けた二階建ての小さな家に入ると、藤井(ふじい)という二十歳半ばの青年が待っていた。

「中野二郎先生から、あなたの紹介状を頂いています」

中野二郎とは、外国語学校を経営している国家主義者で、私はその学校でロシア語と支那語を習った。中野は、教え子たちをシベリアや満州に派遣し、そこで得た情報を軍に流して稼いでおり、藤井はそんな門下生の一人なのだ。

「お世話になります」

「こちらには、ロシア語の勉強ですか？」

と藤井は問うた。彼もまた、語学留学の名目で滞在し、実際には諜報活動に従事しているのだ。うなずくと、

「では、いい先生を紹介しましょう。コサック軍団の大尉です。奥さんは支那語も多少できるので、勉強がはかどるはずです」

むろん、コサック大尉を通じてロシア軍の動向に関する情報を仕入れてほしいとの意図がある事は、すぐに分かった。

紹介されたマラトフ大尉は、四十過ぎの大男だった。夫人のリザヴェータとの間に男の子が二人いた。十歳のカーチャに、八歳のペーチャ。夫婦はともに明るい人柄で、私はすぐ打ち解けることができた。

二階の一室を提供され、子どもたちが登校している間、リザヴェータ夫人からロシア語の授業を受けた。夫のマラトフ大尉は多忙らしく、夜遅い事も多い。リザヴェータ夫人に尋ねると、

「ここのところ、大変忙しいのです」

と答え、こう付け加えた。
「チュァンフェイのせいですよ」
「チュァンフェイ？」
「ええ」
リザヴェータ夫人は、石盤に漢字で「拳匪」と書き付けた。私は問うた。
「義和団のことですか？」
義和団とは、ここブラゴベシチェンスクから二千キロ以上離れた支那の南東にある山東省で起こった宗教団体で、西洋列強の排除を求めて暴動を起こした。外国から来た宣教師や商人、キリスト教徒となった支那人や、海外との貿易で儲けている支那商人を襲い、多数の死者が出ている。西洋列強は清国政府に鎮圧を求めていたが、西太后率いる清国政府も、実は陰で義和団を援助しているとの噂が流れていた。
団員の数は今や数十万とも言われるまでにふくれあがり、それぞれ独特の拳法を身につけているので、支那語で「拳匪」、英語でboxersと呼ばれ、恐れられていたのだ。
「まさか、義和団がこのあたりまで来たのですか？」
「さあ、分かりませんけれど……夫は拳匪のため大忙しだって言ってましたわ」
翌日、武市在留日本人会事務所に足を運んだ。藤井青年に夫人から聞いた話をすると、
「やはり、そうですか」
と腕組みした。
「今のところ、義和団の運動が、この地の支那人に波及した形跡はありません。とはいえ、ここには三千人の支那人が住んでいて、ロシア人たちのなかには、すでに義和団が紛れ込んでいるんじゃないかと怯えている者も少なくない」
「それは危険ですね」
私は言った。
「もし、ロシア人と支那人との間に衝突が起これば、在留日本人も巻き込まれかねない」
「ああ、言われてみれば、確かにそうですね」
藤井青年は、苦笑いした。
ブラゴベシチェンスクには数十人の日本人が住んでいた。多くは洗濯屋や左官屋、遊郭の経営者やそこで働く売春婦といった、いわば食い詰めた流れ者だった。藤井青年は、彼らの身を案じてはいないようだった。むしろ、国のために働いている自分は、彼らとは違うと思っているようにすら感じられた。
かすかに不快なわだかまりを抱いて日本人会事務所を出た私は、すぐにマラトフ大尉の家に戻る気にもなれず、アムール川の岸辺を歩いていた。
ふと、船着き場に小さな船が泊まっているのが眼に入った。対岸のやや下流にある瑷琿との間を往復している渡し船だった。
そういえば……。
私はふと気づいた。

あの少年は、瑷琿から乗りこんできたのだったな。
私は、コートのポケットを探った。いつも持ち歩いている少年が落としたロケットが入っているのを確かめ、私は船着き場に走った。
瑷琿は人口三万人ばかり、城壁とは名ばかりの貧弱な土塀に囲まれた城郭都市である。土塀には四方に門が穿たれ、槍を構えた古風な軍服の清国兵たちがだらしなく立っていた。城壁の外には、粗末な掘っ立て小屋が並び、清国兵たちの兵営になっている。ブラゴベシチェンスクのレンガ造りのコサック兵の営舎に比べると、いかにもみすぼらしい。
極東に覇を唱えようと膨張するロシア帝国と、西欧列強に蚕食され危機に瀕している清国の勢いの差が、そのまま現れているようだった。
兵営の傍らに大木が生えていて、その周囲に三十人ほどの人だかりができていた。見ると、大木の枝には、格子作りの木箱が六つ吊されていて、人々はそれを指さして言葉をかわしあっている。
よく見ると、木箱に入っていたのは、紫色に腫れ上がった人間の生首だった。
「紅鬍子」
隣の人に訊ねると、そう答えが返ってきた。いわゆる馬賊の事だ。
清国の勢力が衰えるに従い、支那大陸各地の治安は極度に悪化した。軍隊や警察は、治安維持には不熱心で、民衆から収奪するばかりで当てにならない。人々は自衛のために武装し、なかには、馬を駆って遠方の地に至り、略奪行為を働く者も現れた。それが馬賊である。
聞けば、昨夜も城内の役人の屋敷が襲われたとの事だった。この地は、密輸される砂金の取引先と噂され、私腹を肥やしている役人も少なくなさそうだった。
大胆な連中だな。
私は、清国軍の兵営を見回して思った。小屋の回りは乱雑で、そこらじゅうに洗濯物が干しているようなだらしない様子だが、それなりに兵を配置し、城壁で囲まれた都市が、馬賊の侵入を許しているのだ。
あるいは、城内の官吏や住民、清国軍兵のなかに、馬賊と内通している者がいるのだろうか。
ふと、馬賊の晒し首を見守る人だかりのなかに、鮮やかな青色の満州服に身を包み、髪の毛を左右にわけて三つ編みにし、ロシア風の外套を羽織った小柄な女が眼に映った。
あの少年だ！
女の衣装を身に付け、薄化粧をしているが、確かに、アムール川を航行する汽船の甲板で出会った、あの美少年だった。
男としてみれば少年だが、女だとすると、二十歳くらいか……。
ふと、格子箱に入れられた馬賊の生首を凝視する女の瞳に、うっすらと涙が浮かび、頬をつたうのが見えた。

泣いているのだ。
いったい、何者なんだ？
男装して独り汽船に乗り込み、馬賊のさらし首に涙する、あの女は？
ふと、眼があった。女の顔が強ばり、さっと踵を返し、こちらに背を向けて人だかりから離れて歩き出した。
私は慌てて、後を追った。

城門をくぐると、清国政府から派遣された官吏が詰める都統府や、周囲に配置された軍隊を統括する鎮守使公署などの官署を中心に、市街の中央に、市街地が広がっている。
女は、まっすぐ背を伸ばし、裾の乱れも気にせず、大股に歩いていく。その足の速さは、男の私でも引き離されずについていくのがやっとだった。
やがて女は、食堂や居酒屋が並ぶ盛り場へと入っていった。夜になれば極彩色の提灯や雪洞で華やかに飾られるであろう通りも、昼間は閑散として、人どおりも稀であった。
やがて女が、「聚英桟」という看板を掲げた客桟（旅館）の前にさしかかった時、中から一人の少女が現れ、
「回来了、太太（お帰りなさい、奥様）！」
と嬉しげに頭をさげた。
太太（女主人）ということは、この客桟の女主人なのか？
そう思って、離れた位置から見ていると、女主人は少女の耳元に顔を寄せ、なにやら短く耳打ちした。少女は心得顔に頷くと、私に向かって小走りに駆け寄った。
十二歳くらいか、彫りの深い面立ちをしていた。体にぴったり張り付くワンピースの支那服ではなく、動きやすそうなツーピースで下半身はズボン、白いひだの着いたエプロンをしている。
「大叔（おじさん）」
少女はにこっと微笑んで首を傾げた。なんだい、と話を聞こうと腰をかがめた瞬間、少女は私の懐に飛び込んだ。
同時に、激痛が股間に走った。
「太棒了、ソヒョン（よくやった、ソヒョン）！」
笑顔になった女主人に拍手され、ソヒョンと呼ばれた少女は、悪戯っぽい仕草で腰を折ってお辞儀した。それから女主人に駆け寄り、はしゃぎまわった。
私といえば、言うまでもなく両手で股間を抑え、情けない格好でうずくまっていた。股間を灼くような激痛と、こみあげる嘔吐、脳裡は屈辱で張り裂けそうだった。
女主人が私に歩み寄って来た。彼女は、自らの懐に右手を入れ、さっと引き抜いて私の額につきつけた。
その手には拳銃が握られていた。
「准（何者だ）？」

笑いを収め、冷ややかな眼差しで問うたが、私は、こみあげる嘔吐を抑えるのに必死で、返事をするどころではなかった。

「為什麼、尾随我（なぜ、私を尾ける）？」

女主人はいっそう面差しを険しくして言った。

私は、やっと右手を動かし、外套のポケットに突っ込んだ。例のロケットを取り出し、女主人に差し出した。

「這是什麼（なんだ、これは）？」

彼女は眉をひそめてそう言い、ロケットを開いた。その眼が大きく見開かれた。あかい唇から漏れたのは、確かに日本語だった。

「ユキ！」

さらに叫んだ。

「なぜ、お前はこれを持ってるの？　お前は何者？」

「あたしは、水野ハナ。この聚英桟の主人」

女主人はそう名乗り、ソヒョンという名の、さきほど私の股間を蹴り上げた少女に運ばせた茶の盆を、私に差し出した。

湯気のたつ茶碗を受け取り、口をつけた。暖かな湯が身に染みわたった。

「ここは治安が悪くて、女一人で出歩くには用心しなきゃならないの。あなたが、あたしのロケットを届けに来てくれたのだと知っていたら、あんな真似はさせなかった。ごめんなさいね」

ハナは頭をさげた。

運び込まれたのは、客桟（旅館）の二階にある一室だった。温突という、朝鮮半島から満州にかけて用いられている一種の床暖房で、厨房のかまどの煙を通し、部屋を暖める仕掛けだ。

私は、床に置いたロシア式のベッドに寝かされ、ソヒョンが運んできた金盥の冷たい水に布巾を浸し、痛む睾丸にあてがった。一時間ほどそうしていると、かなり痛みが和らいできた。その頃合いを見計らったように、水野ハナが部屋に入ってきたのだ。

「いや、私こそ誤解を与えてしまった。すぐ呼び止めて、ロケットを渡せばよかったのだ。すまない」

そう謝る私を、ハナは意外そうな顔で見つめて言った。

「怒らないの？」

「怒る？」

「きんたまを蹴らせた相手に謝られたのは、初めて」

ハナは笑い、さらに言った。

「特に日本人に、そんな男がいるなんて思ってもみなかった」

「そうか？」

「ええ。あたし、日本の男は大嫌い」
そう言って、手にしたロケットを握りしめ、うつむいた。私は問うた。
「君は、生まれは日本なのか？」
ハナは無言でうなずいた。重ねて問うた。
「支那は、長いのか？」
「十三の時からだから、もうかれこれ七年ばかり……」
十三歳で生まれ故郷を離れ、こんな極寒の地に渡ってきたのか。
ふと、さきほどハナがロケットを開いて、「ユキ！」と叫んでいたことを思い出した。幼馴染（おさなじみ）だろうか。二人並んで、仲良く映っていたが、年格好から言って、ハナが支那にわたってきたころの写真のようだ。
「ご両親も一緒なのか？」
「からかってるの？」
ハナは顎（あご）をあげて、こちらを向いた。眼に蔑（さげす）みの色が浮かんでいたが、私が真顔なのを見て、驚いた面ざしにかわった。
「まさか、真面目な質問だったの？」
「あ……ああ」
ハナは、あきれ顔で言った。
「あなたは、いつここに？」
「今日来たばかりだ。昨年の暮れに語学留学のためロシアに渡り、しばらくウラジオストックにいたのだが、十日ばかり前から対岸のブラゴベシチェンスクに滞在している」
「学生さんなの？」
「まさか、元軍人だ」
「軍人さんが……」
ハナはしばし私を探るように凝視し、それからうつむいて苦笑いした。
「なるほど、軍事探偵ってわけね」
言い当てられて驚く私に、ハナは続けた。
「このあたりの日本人は、食い詰め者でなきゃ、軍なんかから金をもらって情報集めをしている大陸浪人ばかり。あなたくらいの年の元軍人さんの語学留学といえば、諜報活動をしてると相場は決まってるの」
「……」
「でも、あなたみたいな世間知らずじゃ、あっという間にロシア側にばれちゃいますよ」
「世間知らず？」
「ええ、だって両親と一緒に支那に渡ってきた良家のお嬢さんが、客棧（クゥーヂァン）の太太（タイタイ）（旅館の女主人）なんてやってるはずがないじゃありませんか」
「そうなのか？」
「ええ」

ハナは立ち上がり、空になった茶碗を盆に載せながら言った。
「ここらへんにいる日本娘は、食い詰め者の家族でなければ、女郎に決まってます」
どう返事していいかわからず黙するしかなかった私に、ハナは突然面差しを歪(ゆが)め、ロケットを突き付けて叫んだ。
「あたしと、このユキは、十三のとき、支那に売られてきたのさ！　ここまで言わなきゃわかんねえのか、この唐変木(とうへんぼく)！」
そのまま踵(きびす)を返して、大股に部屋を出て行った。

私は、明治元（一八六八）年、九州の士族の家に生まれた。
私が九歳の時、熊本の神風連(しんぷうれん)が廃刀令(はいとうれい)に反発して武装蜂起した。十歳の時には鹿児島で西郷隆盛(さいごうたかもり)率いる私学校(しがっこう)が、大規模な反乱を起こした。いずれも、武士の特権を剥奪されるばかりでなく、貧窮に陥った士族たちの不平が爆発した戦乱だった。
幸い、私の生家は経済的にはそこそこに恵まれてはいたが、軍人の道を選んだのは、軍学校は月謝が要らなかったからだ。十六歳で陸軍幼年学校に、十九歳で陸軍士官学校に入り、その後、陸軍将校として歩んできた。
世間知らず。
確かにその通りだ。
私は、水野ハナが大きな音をたてて出て行ったドアを見つめて、思った。
純粋培養(じゅんすいばいよう)の軍人で、もちろん諜報活動の訓練など受けていない。ましてや、女ごころなどわかるはずもなかった。
そういえば……。私は、日清戦争の頃を思い出した。
「中尉殿は、もう支那の姑娘(クーニャン)は味わわれたのですか？」
ある夜、台湾の野営地で夕食を取りながら、従卒の井口虎吉伍長が私に問うた。
私は狼狽し、首を横に振った。出征前夜、朋輩(ほうばい)の将校に誘われて遊郭(ゆうかく)に行ったのが、私の唯一の女性体験だったのだ。
井口伍長はにたにた笑って言った。
「そりゃ、もったいない話ですなあ。支那の姑娘(クーニャン)は、日本の女より体格がよくて、心おきなくいろんな事ができます。みんな言ってますぜ」
いろんな事、が何を意味するのか、私には分からなかったが、私は「そうか」と平静を装って問うた。
「みんな、どこで支那の娘を抱いたのだ？　遊郭か？」
「まさか、そんな、お銭(あし)がもったいない」
井口伍長は腹を抱えて笑った。
「中尉殿、俺らは故郷の家族のため、俸給を少しでも節約して送金してるんですぜ。女郎屋なんかで使っちまったら、もったいないじゃないですか」
貧しい農家の次男坊に生まれた井口伍長の身の上を思い出し、「なるほど」と頷(うなず)いてか

ら、私はふと気づいた。
だったら、井口伍長や、似たような境遇にある貧しい日本兵たちは、どうやって……。
「そりゃ、中尉殿、ご存じでしょう?」
井口伍長は笑った。
「そこらの家に押し入って、やっちまうんでさ」
呆然とする私に、井口伍長は付け加えた。
「大丈夫、ちょっと銃でおどしゃ、姑娘(クーニャン)の家族も抗議なんかしません。逆らえば、撃ち殺しても、黙ってりゃ問題にはなりませんから」
あの時、何も言えなかった……。
私は、ベッドに仰向(あおむ)けになり、天井を見つめながら思った。
台湾に出征する直前、私は上官から何度も訓示された。日本は今、江戸幕府が西欧列強から無理矢理に結ばされた不平等条約を改正し、同等の文明国として認められねばならない。戦地においても、国際法を遵守(じゅんしゅ)し、占領地の住民を保護し、文明国の軍隊らしい態度をとらなければならないのだ、と。
だが、実際に私が台湾で経験した戦争は、そうではなかった。若い兵士たちは、熱病と、密林から不意打ちしてくる敵への恐怖に苛(さいな)まれていた。日がたつごとに、戦友はその数を減らす。いつ、自分が死者の列に加わる事になるのか。言葉や表情には出さずとも、兵たちはその恐怖を抑えつけるため、日に日に、人間らしい表情を失っていくのだった。
私自身、一日の辛い行軍の果てにたどり着いた村で、ふと現れた絶世の美女に眼を奪われたことがあった。眼をこすってよく見れば、しわくちゃの老婆だった。それほどまでに、女に飢えていたのか……。なぜだ? 答えは一つだった。
死の恐怖を紛(まぎ)らわしたい。
女性の、柔らかな肌に接すれば、少しは恐怖を紛らわせるのではないか。そんな妄想に取り憑(つ)かれていたのだ。
そう思うと、部下の兵たちの狼藉(ろうぜき)も、咎めだてすることができなかった……。
「大叔(ダァーシゥー)(おじさん)」
朗(ほが)らかな声がして、小間使いのソヒョンが部屋に入ってきた。両手で、湯気の立つ椀(わん)を並べたお盆を提(さ)げ、満面の笑みを浮かべながら、かたことの日本語で言った。
「ばんごはん、だよ」
いつの間にか、窓の外は夕暮れだった。
部屋に置かれていた小さな食卓を、ベッドの傍らに引き寄せ、夕食の盆を載せながら、ソヒョンは問うた。
「きんたま、まだ、いたい?」
西洋人のような彫りの深い面立ちの美少女の口から、男性器の名称が漏れた事に、私は苦笑しながら答えた。

「だいぶ、いい」
「よかた」
夕食は、魚の切り身の入ったスープに米飯、トウガラシをまぶした白菜の漬物、それにウォッカだった。スープを木の匙ですくって飲んだ。
「うまい」
と私が笑顔を向けると、ソヒョンは、
「大叔（おじさん）、おかしな人。ほんと、おかしな人」
と笑った。
「おかしな人か？」
「わたし、大叔のきんたま、蹴った。でも、怒らない」
「そうだな」
私は苦笑した。この部屋に運ばれてからもしばらくは、あまりの激痛に涙を流しながらベッドの上でのたうちまわっていた。なんとか回復したが、まだ睾丸に鈍痛が残っている。
そんな屈辱的な目に遭わせた少女を前にしても、なぜか、彼女に対して腹をたてる気にはならないのだ。
「太太（旅館の女主人）も、言てたよ」
「なんて？」
「すっごく、いい人だって」
「私がか？」
「ちょっと怒てたけど、大叔のことはいい人だって。太太、日本人、嫌い。でも日本人だけど、大叔はいい人だって」
「太太は日本人だろう？」
「そう、日本人」
「なのに、日本人が嫌いなのか」
「私も、あまり好き、ない」
ソヒョンは言った。
「日本人、いばってる」
言葉とともに美少女の顔に浮かんだ険しさに、私の脳裏に忌まわしい光景が甦った。
東洋鬼！
台湾で、日本兵を殺害した少女たちが、そう言いながら浮かべていた、憎悪に満ちた面差しだった。
「켄찮아?」
その言葉に我に返ると、ソヒョンが気づかわしげに私を見つめていた。켄찮아が「大丈夫？」を意味する朝鮮語であることを思い出し、私は笑みを作って、
「大丈夫だ」
と答え、それから問うた。

「君は、朝鮮人なのか？」
「어머니（母親）は조선（朝鮮）」
そう答えたソヒョンの面差しは、ひどく寂しそうだった。
母親は朝鮮人だが、父親はそうではないのだろうか。
十三歳で、この地に売られてきた水野ハナと同様、この美少女の生い立ちにも、複雑な背景があるのだろう。
彼女を見つめる私のまなざしに気づいて、ソヒョンは再び笑顔を作って言った。
「아버지（父親）はロシア」
やはり、西洋人の血が入っていたのか。ソヒョンは続けた。
「어머니（母親）は死んだ。아버지（父親）は、どこにいるか、分からない」
想像したとおりだった。酷寒の地に流れてきた朝鮮人女性が、おそらく娼婦だったのだろう、この地のロシア人相手に妊娠し、そして生まれたのが、目の前にいる美少女なのだ。
「でも、わたし、괜찮아（大丈夫）。だって……」
ソヒョンは、気づかわしげな私の面差しに、すてきな笑顔を向けて言った。
「太太に、だいじに、されてるから」

その夜、夢をみた。
あの、台湾で私が幼い少女を誤って射殺した屋敷の食堂に、私は座っていた。
私の向かいに、あの幼い少女とその父親らしい男が席に着き、私に茶を勧めていた。やがて、少女の母親らしい女性が、お盆に点心を載せて運んできた。
少女が、湯気のたつ点心の包子に手を伸ばして頬張る。父親が、箸を使いなさい、と注意し、少女が何か言い返す。食卓は笑いに包まれた。
私が射殺した人々が、私を殺そうとした女が、ともに食卓を囲んで笑いさざめいている。久しぶりに幸福な夢だった。

窓の外で、馬のいななきが響いた。
一頭ではない。二頭……いや、三頭か。
眼が覚めた。私はベッドから飛び降り、反射的に枕元に置いてある拳銃を掴んだ。六連発の二十六年式軍用拳銃を構え、窓に近づいた。カーテンをそっとめくって外を見る。冷え冷えとした闇のなか、思ったとおり、三頭の馬が客桟の玄関につながれていた。乗り手の姿はない。
階下から、人声や靴の音が響いてきた。何を喋っているかは分からないが、支那語だった。男たちの声に混じって、女の声もした。
水野ハナに違いなかった。
やがて会話はやんだ。再び窓の外を見ると、分厚いコートに、ロシア帽をかぶり、背に小銃を負っている男たち三人出て来て、馬に跨った。

馬賊……？

馬尻に鞭をあて、闇の中に駆け去った男たちの跡をしばらく眼で追いながら、私は考え込んだ。

この宿は、あるいは水野ハナは、馬賊と関係があるのだろうか。

兵営の側の大木に吊された、馬賊の晒し首を見ながら、うっすら涙を浮かべていたハナの面差しが脳裡に甦った。

だとすれば……。

ハナは、私が日本の軍事探偵として諜報活動に従事していると見破った。その私が、支那人馬賊にとって、敵と見なされるのか、味方と見なされるのか……。

私はベッドに座り、テーブルの上に置いた壜からウォッカを金属製のコップに注ぎ、呑み干した。アルコール度の強い液体が、四肢を刺激する。

ふと、ウラジオストックで聞いた噂を思い出した。多くの日本軍将校が、参謀本部の命を受けて民間人になりすまし、馬賊の首領たちと接触しているとの事だった。来るべきロシアとの衝突に備え、戦地となるであろう満州の馬賊たちを味方につけておこうという意図らしい。

ここはむしろ、馬賊とつきあいのある旅館に泊まったのを幸い、彼等と交流を持ち、情報収集に役立てるべきではないか。

水野ハナに探りを入れてみよう。

そう心に決めて眠りについた。

（つづく）